

要約

議題：家族の変化と親子関係—家族モデルと家庭内の親の役割の視点から—

学籍番号 19151025

氏名 河野真樹子

家族の形は直系制家族から夫婦制家族、合意制家族へと変化してきた。家族の形が多様化してきている現代では、親子関係や親の家庭内での役割も変化してきているのではないかと疑問を持った。その中でも、先行研究から親子関係と子どもの家族観や家庭での親の行動は密接に関係しているということを知った。本論文の目的は、子どもが感じる親からの受容度、家族モデル、道具的役割・表出的役割という 3 つに焦点を当て、親子関係と家庭内での役割の変化を明らかにすることである。そこで大学生を対象に中学 3 年時の家族モデル、高校受験期と高校入学時の親の行動に関する調査票調査を行った。その結果、家族モデルが異なると子供が感じる親からの受容度に違いが生じること、家庭内での親の役割と受容度にも関係があること、親の家庭内での役割が変化してきていることが確認できた。

キーワード：家族モデル, 受容度, 道具的役割・表出的役割

1 はじめに

1.1 研究背景

近年、家族のかたちは多様化してきているといえる。自分の中ではあたりまえだと思っている家族形態も、ほかの人からすればあたりまえではない可能性が多い。友達と自分の家族の話をしたことがある人は、自分の家族と友達の家族の違いを感じたことがあるのではないだろうか。家族のかたちは戦前から現在まで変化し続けている。戦前、家族の大半は、直系家族であった。それが戦後になると、核家族が主流になった。そして現在、家族のかたちは多様化してきている。単身世帯と夫婦のみの世帯、ひとり親と未婚の子のみの世帯は増加の傾向にあり、核家族世帯といわれる夫婦と未婚の子のみの世帯と三世代世帯は減少の傾向にある。厚生労働省の国民の生活基礎調査のデータによると、1986年は単身世帯が18.2%、夫婦のみの世帯が14.4%、夫婦と夫婦の子のみの世帯が41.4%、ひとり親と未婚の子のみの世帯が5.1%、三世代世帯が15.3%となっている。2001年は単身世帯が24.1%、夫婦のみの世帯が20.6%、夫婦と未婚の子のみの世帯が32.6%、ひとり親と未婚の子のみの世帯5.7%、三世代世帯が10.6%となっている。2017年は単身世帯が27.0%、夫婦のみの世帯が24.04%、夫婦と未婚の子のみの世帯が29.5%、ひとり親と未婚の子のみの世帯が7.2%、三世代世帯が5.8%となっている（厚生労働省 2018）。

家族のかたちが多様化する中で、親子の関係も多様化してきているといえるだろう。これまでは、男性が外で働くことで家庭を支え、女性が家の中で家事を行うことで家庭を支える世帯が一般的であった。しかし、共働き世帯は増加の一途をたどり、現在では共働き世帯の数は、男性雇用者と無業の妻からなる世帯の数よりも多くなっている（内閣府男女共同参画局 2018）。このことから、家庭内での夫婦の役割が変化してきているといえるだろう。この役割の変化は、親子の関係に影響を及ぼしているのではないだろうか。夫婦の家庭内での役割が親子の関係に影響していることは日常生活からうかがえる。

例えば、父親と母親から同じことを言われたときに、どちらかには反抗したくなるが、どちらかには素直に従おうと思える、このように感じた経験はないだろうか。筆者は、両親から同じことを言われても普段から怒られることのない父親から言われたときの方が素直に従おうと思えることが多かった。また、素直に従おうと思える父親のほうが、普段から怒られることが多く言われたことに反抗してしまう母親に比べ、自分のことを受け入れられていると感じることが多かった。このように受け入れられていると感じることと普段の親の行動にも関係があるのではないだろうか。

そこで本論では、「子どもが親から理解をしてもらっていると思うかどうかは、その家族が所属する家族モデル、家庭内の親の役割に関係しているのではないか」という問題について論じていきたい。はじめに家族モデル、道具的役割・表出的役割、受容度に関するの先行研究を紹介し、本研究に関する理論をまとめる。その後、本論の目的・意義を示し、本研究の調査方法・結果を記し、最後に結果、考察、結論を述べる。

1.2 先行研究

(1) 直系制家族(直系家族)

この類型の家族は、生活基盤が、農家や商家などに多くみられたように、家業経営に置かれているような社会と、そこでの家族に適合する(木下ほか編 2016)。以下、直系制家族の成立について説明していく。

明治政府は、その開始とともに直ちに中央集権化を企て、近代国家の形成のために各地に分布する姉家督制や隠居分家性や末子相続制などを、父系優先の直系家族制を基礎にした「家」制度を意図的に制度化させた。直系家族制としての「家」制度は、明治政府にとっては不可欠な徴兵制度や徴税制度の基礎であった。国民の大勢は、明治政府が行った、新律網領の公布、長男相続制の強制、

徴兵令の猶予，分家禁止令，戸籍法などの政策によって，短期間のうちに長男相続制へと導かれた。特に 1971 年に公布された戸籍法は，国民に，戸主権という概念や，家督相続という概念を芽生えさせることに貢献した（野々山 2007）。

こうして制度化していった直系家族制の「家」制度は，国民の間に着実に浸透し，制度としての家族であると同時にモデルとしての家族にもなっていた。また，「家」制度は，家族イデオロギーとしても定着していった。一方で，家に所属する個人としての成員たちは，戸主権を有する家長（戸主）を中心として本籍と永続性に象徴される「家」の繁栄に貢献する忠実かつ恭順な従僕であることが期待された。家長も「家」存在と外部に排出した者たちや年下の弟や妹たちの安寧をつねに配慮することが期待された。直系家族の「家」制度は，戸主（家長）に強い権限を与えることによって，戸主と家族成員たちとの関係および家族成員たち自身のあいだの関係をそれぞれ固定的な地位役割関係として確立し，長男を跡取り（継嗣）にして次三男以下を排出していくという巧妙な家族制度として定着していった（野々山 2007）。

初期工業化の発展とともに都市に人口が集中しはじめ，農業に従事することのない給与生活者の家族が登場し，いわゆる主婦の誕生となっていった。それまでの「家」制度における嫁（妻）は，戸主とともに農作業に従事しながら家畜の世話や子どもの世話，そして衣食住に関する家事万端から内職まであらゆる作業を分担していた。しかし戸主である夫が給与生活者となれば，農作業に従事することはない。戸主にしても，家族の集う家庭は「安らぎの場」である。勤務を終えて帰宅する夫のために家庭を整え，その一方で子どもの世話や教育に専念する主婦は，当時の女性たちにとって憧れの理想像となった。主婦の誕生も「家」制度または「家」イデオロギーとは無関係ではなかった。夫の成功に自己同一化を促すように促したり，長男単独相続制の「家」制度のもとで男児を育てる婦徳としての母役割を強調したり，

老親に献身的に仕える嫁役割を強調したり、国家に尽くす大和撫子の責務などが協調されるようになった。このことは、良妻賢母の登場を生み、「男は仕事、女は家庭」という固定的性別役割分業の家族理念において期待される女性像と同一のものであり、次代に引き継がれていくことになる（野々山 2007）。

(2) 夫婦制家族

この制度下の家族は、典型的には、夫婦の結婚によって形成され、死亡によって消滅する一代限りのものである（木下ほか編 2016）。以下、夫婦制家族の成立について説明していく。

戦後改革の第 1 は、民法の改正と戸籍制度の改正による「家」制度、すなわち直系家族制の廃止であった。そして第 2 は、農地改革による地主小作制度の廃止であった。確かに戦後、日本では民法改正によって制度としての家族という点での民主化や近代化が法的に確立した。しかし、法制上での改革によって、それまでの家族慣行がすぐに変化することはあり得ない。単独相続慣行の維持（すなわち、次三男以下の排出）や老親の単独供養慣行や婚姻後の夫方名氏への同姓化慣行など、従来の直系パターンは戦後も揺るぎなく継続されていった（野々山 2007）。

しかし、都市における給与生活者の家族においては「家」制度の廃止がそれまでの家族制度にそれほど大きな影響はなかった。法改正によって意識が変わったのではなく、工業化とともに戦前すでに都市を中心にして実質化しつつあった夫婦単位の家族構造が戦後の法改正によって正当化されたにすぎない（野々山 2007）。

核家族世帯の増大は、日本の高度工業化の進展に促されたものである。当時、過剰労働力として社会問題化していた農村における次三男以下が直系同居家族の形態の親元から離村して、都市に働きに出て、そこで結婚することによって核家族形態の新世帯を形成したからであったり、子ども夫婦（長

男夫婦)が高度工業化の進展に促されて直系同居家族の親元から離村して都市に働きに出て行ったりしたために、親もともに核家族形態の世帯を形成することになった。そこには、それまで営んできた生活レベルとは異なっても少しでもそれを上昇させたいとする「家族生活の向上動機」にもとづく個別の実践が開かれていた(野々山 2007)。

「家族生活の向上動機」は、主としてアメリカの文化の導入によって誘発された。導入はテレビによって進められた。テレビに放映されるアメリカ文化の代表としてのホームドラマは、必然的にその目指す理想モデルとして受け止められた。その理想モデルとしての家庭像は、自家用車や多くの家庭家電製品に囲まれながら固定的性別役割分業の上に成り立つ、夫婦と子どものみによって構成される1つの集団としての家族像であった。この頃から、かつての家族意識であった本籍にもとづく「家」への所属意識は、徐々に衰退し、人びとは夫婦と未婚の子供からなる核家族を1つの家族として認識するようになった。夫婦家族制への家族観の移行は、とくに民法の改正や婚姻とともに新戸籍が創設されるという戦後の戸籍制度の改正の結果としてではなく、都市における個々の家族システムが夫婦単位を中心にして構造化されるという夫婦制家族を個別的に実践していったからである(野々山 2007)。

また、結婚における自由恋愛の普及とともに家族形成の出発点から友愛的な情緒的結合が重視されるようになり、特定の親族関係に偏ることなく、血縁と姻縁の双方向的な親族高裁の展開となっていった。ここに高度工業化に適合的な夫婦関係を中心にした経済的ならびに情緒的単位としての夫婦制家族がほぼ成立することになった。夫婦制家族を3つの構造からみていく。勢力構造については、夫中心の勢力構造が見いだされ、妻は結婚とともに姓を変え、夫側に嫁ぐ嫁入り婚慣行が維持され、核家族形態の夫婦制家族であろうとも、従来の分家のように、夫の父母に対しては嫁役割が期待された。結合構造については、婚姻届けによって幸せな結婚が生涯自動的に保障されるかのように錯覚され

ており、男女が一度結婚するとその契約によって夫婦関係は生涯継続ないし拘束されるものとされ、そこには契約更新の観念は存在せず、契約解消の議論の余地もない不幸というスティグマが与えられ、離婚は自ら不幸という概念へと追いやられていった。法律婚以外認めず、婚外子の法的差別も黙認されたままであった。情緒構造については、夫（父）を中心にして一心同体的な情緒行動にあることがつねに強調され、夫婦のあいだで個人としての尊厳や固有の情緒は無視され、夫と妻のあいだに異なった情緒が存在することは、容認されてはならないこととされた（野々山 2007）。

ここまでみてきたように、夫婦制家族は直系制家族から時代とともに変化していった。落合恵美子はこの夫婦制家族を1.家内領域と公共領域との分離、2.家族構成員相互の強い情緒関係、3.子供中心主義、4.男は公共領域・女は家内領域という性別役割分業、5.家族の集団性の強化、6.社交の衰退とプライバシーの成立、7.非親族の排除、8.核家族であるとしている、としている（落合 1994）。このことから、現代の家族規範やジェンダー意識は夫婦性家族の意識が根付いているものだといえる。

(3) 合意制家族

今日、平均寿命の伸長や社会化の平等化などによって既婚女性たちの就労化の拡大ならびに経済的自立や個人化の進展が促進されてきた。これまで妻（母）の家族役割に全面的に依存することによってのみ可能であったその他の家族成員たちの個人化を脅かしはじめることになる。高度情報化による内外の多様なライフスタイルについての情報の入手は、多事的自己言及を促進する。これにより、改めて家族成員間において自己変革の対話が生じ、構造変動が促進され、新たなライフスタイルの合意選択へと向かうことになる。既存女性の個人化の進展は、家族システムの構造維持における家族役割を相対的に低下させ、家族生活が家族成員たちの任意的かつ選択的なライフスタイルになることを促す。ここでは集団規範よりも、家族成員たちの選好同期が優先され、逆にそのことが同等に保障されることが

集団規範となっていく。したがって、ライフスタイルとしての家族システムは、規範拘束的でも、集団拘束的でもなく、人格拘束的になっていく可能性は否めない（野々山 2007）。

家族成員の個別の生活選好にもとづいて家族ライフスタイルが集団選択される場合、成員たちの個人的選好は、ときに集団選択である家族の生活選好とは違う場合もある。とはいえ、従来の規範的拘束性や集団的拘束性から解放されようとしている合意性家族の時代には、民主主義的な状態を築くことが課題である。そこには、少なくとも次の3つの項目が家族規範として不可欠になってくる。（1）家族成員間においては、それぞれの自立あるいは、相互の創造的共感あるいは配慮にもとづく保護と依存が前提であることが確認されること。（2）短期的な相互交換の採算性を保障するよりは、家族成員すべての自己実現が可能になるような長期的な配慮を保障すること。（3）家族生活における生活選好には、多元的な選択領域が存在することから、まず全体次元と個別次元とを区別し、そのうえで個別次元での各自の多様な選好の自由な選択を最大限保障すること。以上3つのことが不可欠である。この課題は、家族成員はもちろんのこと、社会全体が取り組むことである。このとき家族は、制度や集団というよりは、家族成員すべてにとっての家族ライフスタイルということになり、そのとき家族は「成員すべての福祉実現のための第一次集団」であるということになる（野々山 2007）。

ごく最近の家族に関する変化は、家族それ自体が「集団としての家族」というよりは、さまざまなライフコースを生きる複数の個人としての家族成員たちの同町（シンクロナイゼーション）の場としての家族となってきた。家族が、集団の視点というよりは個人の視点に立って、個人が主体的かつ任意的に選択する生活スタイルないしライフスタイルの対象として理解されなければならない存在になりだしてきている。家族が「集団としての家族」の側面よりも、「ライフスタイルとしての家族」という側面を重視することは、家族が個人にとっての1つのライフスタイルということになる。そうなれば、家族の動向は、いわゆる核家族化

といったような画一的なワンパターン化であるとは限らない（野々山 2007）。

以上みてきたように、家族は時代が進むにつれ、直系家族、近代家族、合意制家族へと変化してきた。その変化とともに、家族成員に求められるものを変化し続けているといえるだろう。

(4) 道具的役割・表出的役割

タルコット・パーソンズは家族の機能の一つに子供の社会化を挙げている。核家族は自立した社会ではなく、一つの社会のなかの小さな高度に分化した下位体系であり、この環境は、子供の社会化に適した環境である。これには、2つの理由がある。第一に、社会化の担当者としての両親は、単に家族内の役割を持つだけでなく、社会の他の構造でかれらがもつ役割と接合し、相互に浸透し合っていること。これは、両親が子供の社会化を促すために有効に機能するための必要条件である。第二に、子供は養育家族のなかへと社会化されるだけでなく、家族を超えてひろがる社会構造のなかへと社会化されること。その社会構造の中には、大人の職業上の役割や、子供の学校や仲間集団、子供が結婚して形つくるであろう生殖家族といったものが含まれている（Parsons 1955 = 2001）。

核家族とその家族以外の社会との橋渡しをするうえで重要になるのが父親（夫）の存在である。これが父親（夫）の道具的役割である。父親（夫）職業の世界や仕事、あるいは仕事を通じて家族のため地位を獲得し、収入を得るという機能に腰を据えている。この職業的役割は、「職業体系」の一部であり、「相互浸透」の一例でもある。父親(夫)は、仕事を持ち、収入を得ることによって、一つの体系としての自分の家族の本質的機能を遂行している。

核家族の機能との関連において注目すべきことは、男女による役割の分化である。この分化は、男が道具的な役割、女が表出的役割という方向に行われる。男性が道具的な役割、女性が表出的役割をとるのはなぜか。それは、子供を生み、幼時にこれを哺育するというのが、小さな子供に対する

母の関係を元来ひじょうに優先的なものにしてしまう。このような生物学的機能を欠く男性の場合は、そこに代わる道具的な方向へと専門化が行われていく。このような事実によって説明されるだろう。社会で家族と職業体系との区別が明確になったため、家族に対する道具的な責任が父親（夫）に焦点づけられるようになった。また、それを補うような意味で、母親（妻）が子供についての責任を負わねばならないようになる。子供の観点から見ると、これに伴って母親の情緒的な意義が強まってくるだろう。母親による子供の教育という場合、女性は表出的な方向へと専門化してきた。しかし、子供をただ「愛する」だけではなく、その愛の性格・条件・限界を合理的に理解し、愛がゆがんだ形態をとったとき、いかにそれが子供を傷つけるものか、合理的に理解しようと努めている（Parsons 1955=2001）。

以上みてきたように、両親は家族の中で異なる役割を担っており、父親は道具的な役割を担い社会と家庭をつなげ、母親は表出的な役割を担い、子供との情緒的なつながりが強くなる。

(5) 親からの受容度

1998年の新垣・花城の研究では、子供の生活と親子の対応関係が述べられている。その中で、親子の対応関係は、子供自身が親に受け入れられているとの認識をもつことが親子関係の良否にとって重要だと考えられている。このことは、2人が昭和60年11月～昭和61年1月に沖縄県の小中学生を対象に行われた調査で説明している。調査内容は、父親や母親が自分のことを理解しているかを1.学校での出来事、2.つきあっている友人のこと、3.自分の学習状況、4.自分の悩みや失敗、5.自分の喜びや成功、6.関心をもっている遊びや興味の6つの側面から子供に父親と母親と別に問うものである。

以下、子供の側からみた父親と母親について説明する。

まず、子供の側から見た父親像について説明する。子供の半数以上が、父親がよく知っていると答えている自分の側面は「学習状態」「喜びや成功」「遊びや興味」であった。「学校での出来事」「友人の

こと」「悩みや失敗」については子供の側からは半数以上が父親はあまり知らないと答えている。小・中学生別に有意差があったのは、「学校での出来事」で、小学生と比べ中学生は10%関心が増えていた。これは、受験による影響があるのではないかと考える。男女別で有意差がみられたのは「悩みや失敗」「遊びや興味」であった。ここで特徴的なことは、男子では約30%が、父親は自分の悩みや失敗についてよく知っていると答えたのに対して、女子ではそれが約20%と低くなっている点である。このことから、父親と男子という同性どうしで理解しあえる側面があるのではないかと考えられる（新垣・花城 1988）。

次に、子供の側から見た母親について説明する。母親については、「悩みや失敗」を除いたすべての側面で半分以上が母親は自分のことをよく知っていると認識している。また父親と比較してもすべての側面について、父親より母親のほうが自分のことをよく知っている子供は答えており、母子の結びつきが深いことがわかった。小・中学生別では「学校での出来事」「学習状態」「悩みや失敗」「喜びや成功」で有意差があった。そのいずれの側面においても中学生になると、母親は知っていると答える者の割合が減っている。また「悩みや失敗」はこの6つの側面において母親、父親とも共通して最も低い割合となっており、子供の側からみても最も親が理解してくれないと考えている面である。男女別で有意差がみられたのは、「友人のこと」「悩みや失敗」「喜びや成功」の3側面である。そのいずれの側面においても女子は男子よりも母親は自分のことをよく知っていると答えている。前述した父親—男子と同様に、ここでも母親—女子という同性どうしの理解しあえる側面があると思われる（新垣・花城 1988）。

以上みてきたように、子供は父親と母親では母親のほうが自分のことを理解してくれていると感じている。また、父親が自分のことを理解してくれていると思う点に「学習状態」が入り、理解してくれていないと思う点に「悩みや失敗」が入っていることは、パーソンズが述べていた道具的な役割が父親にあり、母親

に比べて表出的なところが父親にかけているからであるといえるだろう。しかし、母親についても「悩みや失敗」については、自分のことを理解してくれないと思っている子供が多いことがわかっている。

さらに 2009 年の高見・佐藤・塩飽の研究では、親役割行動尺度 (Parental Role Assessment Scale) と、その下位尺度の 1 つである〈受容〉が説明されている。以下に記していく。

親役割行動は“子どもの人格形成に影響を与える親の子どもに対する行動で、親の子どもに対する態度や認知的側面を含むもの”と定義している。その下位尺度には「干渉」、「受容」、「分離不安」、「自立促進」、「適応応援」、「自信」の 6 つがある。その中でも〈受容〉は、親子のコミュニケーションの大小や親が子どもの行動、考えなどを理解する傾向を示すものである (高見他 2009)。

また、同研究で、親が子どもを受容することは子どもからみた家族機能の評価を高め、子どもの精神的健康に寄与していた (高見他) という結果が出ており、受容度と家族機能との関連性も示唆されている。

1.3 目的と意義

現在、共働き世帯が増加しており、ワークライフバランスのとり方が問題視されている。家族の形が多様化している現代では、親子の関係、親の家庭内の役割が多様化してきていると考えられる。

親子関係の研究において戸田は、「親子関係は子どもに影響を与える要因としての親を解明しようとしたことに始まる」(戸田 2009) としている。親からみた子どもとの関係性はこれまで多種多様な研究がなされてきた。しかし、子どもからみた親と子どもの関係性はあまり研究されていないことがわかった。また、先行研究では、子どもが感じる親からの受容度が家族機能と関連することがわかっていたが、家族モデルと子どもが感じる親からの受容度の関連については詳しく検討されていない。また、親の家庭内の役割の研究においては、パーソンズの研究で、父が道具的役割を担い、母が表出的役割を担っている

ということがわかっている。この理論が日本で適応されるのかの検討が山村（1964年）によって検討されているが、それ以降は検討されていない。そこで、「家族モデルと親の家庭内の役割が変化すると、子供が感じる受容度は変化するのではないか」というリサーチクエスチョンを設定し、「家族モデル」と「受容度」を中心に3つの課題を検討していく。1つ目は、家族の在り方、つまり「直系家族」、「夫婦制家族」、「合意制家族」の違いから「受容度」がどのように変化していくのかという点。2つ目は、「親の家庭内の役割」と「受容度」がどのように関係しているのかという点。3つ目は、現代の家庭でも父が道具的役割、母が表出的役割を行っているのかという点。この3つを調査することによって、現代の親子関係を明らかにしていきたいと考える。また、親子関係が顕著に表れると思われる中学3年時の受験期、高校入学時についての質問を行うことにする。これは、受験や新しい環境に変わった瞬間の子どもにとって危機的な状況での親子関係を問うことで、真の親子関係を検討することを目的としている。図1はリサーチクエスチョンを図に落とし込んだものである。

さらに、3つの課題それぞれに仮説を立てる。1つ目の課題に対しては「直系制家族モデルから合意制家族モデルに変化するにつれ、子どもが感じる受容度は高くなる」という仮説を立てた。2つ目の課題に対する仮説は「道具的役割と表出的役割が両親で分けられている家庭に比べ道具的役割と表出的役割を両親が平等に行っている家庭の方が、子どもが感じる受容度は高くなる」という仮説を立てた。3つ目の課題に対しては「現代の家庭では、父親が道具的役割を担い母親が道具的役割を担うという家庭内での分担構造が崩れ、両親がどちらも担っている」という仮説を立てた。

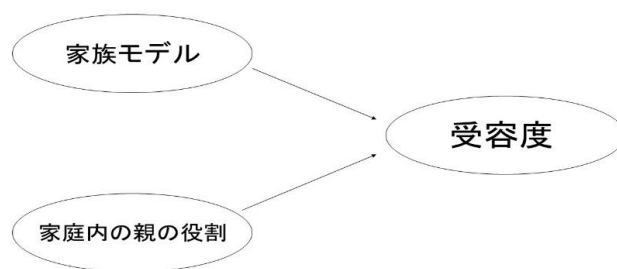


図1 リサーチクエスチョンの図式化

2 方法

2.1 インタビュー調査

受容度を測る調査項目を作成するためにインタビュー調査を行った。外山美樹・樋口健・宮本幸子が行った高校受験期における母親と子供の関係を測るために高校受験時の悩みやストレスに関する設問が12個使用されていた。しかし、12個の設問項目と受容度の関係が同研究で言及されていなかったため、本研究の設問に使用するには不十分だと判断した。そのため、独自にインタビューを行い本研究に沿うような調査項目を作成する。

(1) 調査の概要

調査の方法は、2018年7月24日から2018年10月16日の期間に、1対1のインタビュー形式を採用し、30分程度のインタビューを5人に実施した。また、1人目のインタビューが終わると、質問項目を6つ用意し、その項目に沿ってインタビューを行った。質問項目は、「中学3年時に親から受け入れられていると感じたことがあるか」、「中学3年時、高校入学時には思わなかったが今思うと親に受け入れられていたと感じることがあるか」、「中学3年時に困っていたことや悩みがあるか」、「中学3年時に親からされて嬉しかったことはあるか」、「中学3年時に親からされて嫌だったことやして欲しかったことはあるか」、「中学3年時の親の存在」の6つを用意した。そのインタビュー内容を文章に書き起こした。1人目は、

愛媛県出身の19歳女性で、家族構成は父母姉の4人家族である。2人目は、東京都出身の22歳男性で、家族構成は父母弟の4人家族である。3人目は、京都府出身の21歳女性で、家族構成は父母姉弟妹の6人家族である。4人目は、大阪府出身の21歳男性で、家族構成は父母妹弟の5人家族である。5人目は、兵庫県出身の22歳女性で、家族構成は父母姉弟の5人家族である。話し手の語りの初めには、1人目がA、2人目がB、3人目がC、4人目がD、5人目がEをつける。なお、聞き手についてはすべて**で統一している。

(2) インタビュー内容

インタビュー内容は対象者によって異なるが、インタビュー後、文字起こしを行った。その中で、調査票の質問項目に影響を与えた部分を抜粋し、以下に示す。

(a) 1人目（19歳・女性）

**：受験のとき、思い出して、小学校のときか、その時に親の存在はどんなものだったか 教えてもらいたいです。

A：送り迎え大変やなと思ってた。まあ、家でも勉強しろってうさかったな、みたいなのと。でもまあ、応援してくれとんやろな、とはおもった。

**：アドバイスもらただけって感じ？

A：うん、そんな心にしみたとかはないかな。お母さんけっこう私が言ったことにも軽く返してくるし、もっとちゃんと考えてよって思った。

**：お父さんにはなんて相談しよったん？

A：え、お母さんに対して嫌なことがあったときとか。勉強いやとか。どうしたらいろいろうまくいくのか、

とか。

**：不安を打ち明けてた，ってこと？

A：うん，でも，聞いてくれるから，お父さんは，そうかそうか，みたいな，それが私は楽に，という
か話しやすかった。聞いてくれるのがよかったかなと思った。

**：勉強のことで入学してから困っとることとかあった？

A：ほんまにまじめに勉強してもいい点数とれなくて怒られたときは，もうしたくないなと思った。結局で
きんし，そんなに期待されても困る，みたいな。まあ理不尽に怒られるのもいややったし。

*：受験勉強中に嫌やったことは？

A：勉強できんって怒られることかな。

**：総じて，あんま理解されとるとは思ったことないってことか。

A：んー，わからん。好きなんやろうな，とか，大切にしてくれとんやろうなっていうのは思うけど。

**：じゃあ，逆に，自分のこと好きなんやろうなって思うときは？

A：え，そんなんいつも。でも，怒るとときは本気で嫌い。私が怒られとるときに，死ねとか，おら
んなれとか，言われたときは，生きるのがいややった。それはすごい1人，2人とかの友達に話してずっと
泣きよった。かな。

**：大事にされとるって実感したときは？

A：それもいつも。大事にしてなかったら普通に，怒らんかなって最近をよく思う。勉強しろって言うの
も応援しとるから言ってくれてたんかなって。そう思うと受け入れてもらってたんかな。嫌なことされた時とか
怒られた時は全然そんなこと思わなかったけど，今思うとありがたいなって思う。

(b) 2人目 (22歳・男性)

**：受験期にされて嬉しかったことある？

B：そうね，いい感じで放置してくれたことかな，そんなに勉強のこと言われなかったと思う，逆に言われた時は嫌だったけどね。

**：他に嫌だったことあったりする？

B：怒られるのが嫌だったかも。

**：どんなことで怒られたん？

B：そんなになかったからあんまり覚えてないんだけど・・・，父親から成績のことで怒られたことはあるな。

(c) 3人目 (21歳・女性)

**：中学受験の時ってどんなことに悩みを持ってたか覚えてます？

C：どんなこと？んー，算数ができひんかったことと，親が怖かった。

**：親が怖かった？

C：うん，精神的にも身体的にもストレスフルな時が多かったな・・・，え，あとあるかな，塾もあんまり好きじゃなかったし，家でもあんまり勉強できひんかたし，ん，そんな感じやな。

**：じゃあ，親に理解されていると感じることが出来た瞬間とか，親からの行動とかってありますか？

C：ん-----，塾の送り迎えをしてくれた，塾の費用を払ってくれていた，受験の日に頑張れって言うてくれた，励ましてくれた，・・・それ以上はちょっと思い浮かばへんわ，怖かったって感情があったから，怒られてるときとかはそんなこと思われへんかったし。

(d) 4人目 (21歳・男性)

**：受験期の親御さんの存在ってどんな感じやった？

D：俺的には1番いい感じというか、距離感が1番いい感じ。全然言ってこーへんし、勉強しろとか。拘束もせーへんし。何時から何時まで勉強しろ、みたいな。とりあえず、たまに勉強しーやって言ってくるくらい。これが母親かな。

**：お父さんは？

D：お父さんは、なーんも言ってこんかった。全くノータッチ。あんまり興味なかったんやろな。全然関わってこーへんかった。から、まー、親からあんまりやいやいは言われんかったかな。

**：親御さんからされて嫌なこととかあった？

D：興味持ってもらうことに関してはあきらめてたかな。興味ないやろうから言ってもあれやろうし。やから悩みを聞いてもらうこともなかったし。聞いてくれる素振りもなかったな。あ、でも、受かったらな、通ったら努力は認めてほしいって思ってたけど。むしろ、隠してた。成果みたいな。実は見せてなかったけどこんだけ頑張ってたんやぞって言うのを言いたかった気持ちはあった。

**：中3の時に親からされて嬉しかったこととかある？

D：なんやろなあ、えっとね、あたりまえっちゃあたりまえなんかもしれんけど、ほんまにもう夜1時とか、2時とかなるねん。まあもう寝てるやん、普通は、でも起きてるねん、なんか。で、なんか食べるか？みたいな、言ってくれるから、それはよかったかな。

**：高校1年生の入学したてくらいの時に親からされて嬉しかったことある？

D：そうやな、例によって父親はなんも言ってこーへんかったからな。あ、そうやな、弁当やな。中学の時は毎日給食やったからさ。高校になったら毎日弁当つくってくれてて、いいもんやな、うれしいな、って思った。毎日やしな。

**：親御さんから受け入れてもらってるって感じたことある？

D：んー，わからんなあ，そんなないかも。でもさっき聞かれたことに答えてたら，嬉しかったこととか，かな？そしたら，自分のためにしてくれてることって自分の事を大事にしてくれてないとき，してくれへんやんか，たぶん。やから，そういうのは受け入れてもらえてたんかなって思うかなあ・・・。

(e) 5人目 (22歳・女性)

**：受験期の親が私の事わかってるわって思った瞬間とかある？受け入れられてるじゃないけどさ。

E：大丈夫やろ，とかそういう感じ？励ましてくれるみたいな，変に不安にならへんかった。陰で支える的な。

(3) インタビューに基づく調査票設計

以上のインタビュー調査結果をもとに，アンケート調査に用いる調査票の設計を行った。結果から，受容度と嬉しく感じたこと，嫌だと感じたことには密接な関係があることがわかった。親からされて嬉しかったことが多いと受容度は増し，親からされて嫌だったことが増えると受容度が低くなることがわかった。また，その時には受容度を感じられていなくても時間が経って思い返すと受容度を感じるようなこともあることもわかった。

調査項目の作成時に参考にした言葉を以下に紹介する。「送り迎え」，「軽く返してくる」，「不安を打ち明けてた」，「いい点数とれなかった時は怒られた」，「勉強できんって怒られる」，「勉強しろって言うのも応援しとるから言ってくれてたんかなって」，「いい感じで放置してくれた」，「成績のことで怒られた」，「励ましてくれた」，「全然言ってこへんし，勉強しろとか」，「あんまり興味なかったんやろな」，「悩みを聞いてもらうこともなかったし」，「なんか食べる？みたいな」，「弁当やな」，の以上14個である。この13個を参考にし，12個の設問をつかった。表1は今回作成した設問項目である。

表1 受容度を測るために作成した尺度

学校や塾の送り迎えをしてくれる
励ましの言葉をかけてくれる
勉強するように促してくれる
悩みや不安な気持ちを聞いてくれる
夜食を作ってくれる
「勉強しろ」と口うるさく言う
テストや模試の成績が上がらなくて怒られる
自分の受験に興味を持ってくれない
悩みを伝えても軽いアドバイスで返される
悩みを聞いてくれる素振りが無い
「勉強しろ」と口うるさく言わない
お弁当を作ってくれる

2.2 質問紙調査

(1) 調査概要・対象

本研究では、大学生を対象として質問紙調査を行った。調査票は、同志社大学の講義中に回答してもらったものを回収するか、友人やその友人に配布し後日回収するか、Google フォームを作成しインターネット上で回答してもらった。75 枚の調査票を回収し、Google フォームでは 37 人から回答を得た。よって、最終的には 112 人から回答を得ることができた。なお、調査票の表紙には、調査の趣旨・得られたデータの使用目的、回答から個人が特定されることや個人情報漏えいすることはしないということなどを明記した。得られた回答はすべて、統計ソフト SPSS Ver.25 を用い数値化し分析を行った。

(2) 家族モデルの得点化

回答者の中学 3 年時点での家族モデルを解析するために、野々山久也の『現代家族のパラダイム革新』（2007）で述べている〈直系制家族〉、〈夫婦制家族〉、〈合意制家族〉の 3 つのモデルのなかのどのモデル傾向を示すのかを測る質問項目を 18 項目（直系制家族：5 項目、夫婦制家族：5 項目、合意制家族：8 項目）を作成した。この 18 の質問項目は、同著者の中の 3 つのモデルのそれぞれの特徴を示した箇所を引用した部分と、高橋理（2015）の質問項目を参照し、手を加えたものを

使用した。この設問は問 1～3 に該当する。表 2 は使用した 18 個の設問をまとめたものである。

表 2 家族モデルを測る設問

長男は結婚した後、両親と同居すべきだ	直系制家族モデル
家庭内において、長男は次男以下よりも優位にたつべきだ	
長男は結婚後も親と同居し、世帯を世代的に継続させるべきだ	
父親が家族を統率する権利を持つべきだ	
結婚時において姓は夫側の姓を選択したい	夫婦制家族モデル
夫は家庭外就労をして家庭の経済的支えとなり、妻は家庭で家事や育児をすることは当然である	
家庭内で子供の世話を中心的にするのは母親である	
結婚後は個人のライフスタイルを優先するよりも、家族としてのまとまりを優先するべきである	
結婚するということは、結婚相手と人生を共有し、一生、一心同体になることである	合意制家族モデル
妻は夫の家系を継続させるために子どもを産むものである	
家族の形は決まりきった型に当てはめる必要はない	
限りある人生を家事や育児よりも趣味のために使いたい	
結婚するのに適正年齢はない	
親と子供だけで構成される核家族形態にこだわる必要はない	
生涯において結婚をする必要はない	
結婚後は男性の姓に合わせるのが適正である	
夫は家庭外就労、妻は家庭内で家事や育児という役割にとらわれる必要はない	
必ずしも男性が家を支える大黒柱でなくてもいい	

リード文は、「以下は「あなたの家族に関する考え」をたずねる項目です。中学 3 年生時の考えを思い出して回答してください。あなたはそれぞれの問いにどの程度あてはまっていましたか。もっとも近い数字を 1 つ選んで○をつけてください。」とし、「1 つ選んで○をつけてください」の部分に下線を引き、強調するようにした。

この項目では、それぞれの質問に対して、1「そう思う」、2「どちらかといえばそう思う」、3「どちらかといえばそう思わない」、4「そう思わない」で回答してもらった。問 1、問 2、問 3 は逆転項目であるため、これらの項目については分析時に数値を逆転して用いている。また、問 1 の 5 つの質問の回答の得点を

足し合わせたものを〈直系制家族点数〉、問 2 の 5 つの質問の回答の得点を足し合わせたものを〈夫婦制家族点数〉、問 3 の 8 つの質問の回答の得点を足し合わせたものを〈合意制家族点数〉とした。この時、それぞれの質問の合計点数が高い人ほど、その家族モデル傾向が強いとした。

(3) 受容度の得点化

回答者の受容度を解析するためにインタビュー調査の結果をもとにした調査項目を使用した。使用した質問項目は 20 項目（中 3 嬉しかったこと：5 項目、中 3 嫌だったこと：5 項目、高 1 嬉しかったこと：5 項目、中 1 嫌だったこと：5 項目）を使用した。この設問は問 4～7 に該当する。

問 4、問 6 は、①学校は塾への送り迎えをしてくれる、②励ましの言葉をかけてくれる、③勉強するように促してくれる、④悩みや不安な気持ちを聞いてくれる、⑤夜食をつくってくれる、の 5 つの設問に対する中 3 時、高 1 時の親の行動の頻度を測定することを目的とする。また、それぞれの質問に対して、1「してもらっていた」、2「どちらかといえばしてもらっていた」、3「どちらかといえばもらっていない」、4「してもらっていない」の 4 件法で答えてもらった。

問 5、問 7 は、①「勉強しろ」と口うるさく言う、②テストや模試の点数が上がらなくて怒られる、③自分の受験に興味を持ってくれない、④悩みを伝えても軽いアドバイスで返される、⑤悩みを聞いてくれる素振りが無い、の 5 つの設問に対する中 1 時、中 3 時の親の行動の頻度を測定することを目的とする。また、それぞれの質問に対して、1「されていた」、2「どちらかといえばされていた」、3「どちらかといえばされていない」、4「されていない」の 4 件法で答えてもらった。

リード文は、問 4「以下は「親の家庭での役割」をたずねる項目です。中学 3 年時の親の行動を思い出して回答してください。あなたは、それぞれの問いにどの程度あてはまっていましたか。もっとも近い数字を 1 つ選んで○をつけてください。」、問 6「以下は「親からされて嫌だと感じた行動」についてたずねる項目

です。中学 3 年時の親の行動を思い出して回答してください。あなたは、それぞれの問いにどの程度あてはまっていたか。もっとも近い数字を 1 つ選んで○をつけてください。」とした。また、問 5 のリード文は、問 4 の「中学 3 年時」を「高校 1 年時」に変更し使用した。問 7 のリード文は、「中学 3 年時」を「中学 1 年時」に変更して使用した。さらに、「1 つ選んで○をつけてください」の部分に下線を引き、強調するようにした。

問 4 の 5 つの質問の回答の得点を足し合わせたものを〈中 3 嬉しかったこと得点〉、問 5 の 5 つの質問の回答の得点を足し合わせたものを〈中 3 嫌だったこと得点〉、問 6 の 5 つの質問の回答の得点を足し合わせたものを〈高 1 嬉しかった得点〉、問 7 の 5 つの質問の回答の得点を足し合わせたものを〈中 1 嫌だった得点〉とした。この時、問 4、問 6 の質問の合計得点が高い人ほど、受容度が高いとした。また、問 5、問 7 の質問の合計得点が高い人ほど、受容度が低いとした。

(4) 道具的役割・表出的役割の得点化

回答者の親の家庭内の役割を解析するためにインタビュー調査の結果をもとに作成した 8 つの調査項目を使用した。この設問は問 8 に該当する。

問 8 は、①学校・塾への送り迎え、②励ましの言葉をかけてくれる、③勉強するように促してくれる、④「勉強しろ」と口うるさく言わない、⑤テストや模試の点数が上がらなくて怒る、⑥自分の受験に興味を持つ、⑦自分の受験に興味を持たない、⑧夜食を作ってくれる、⑨お弁当を作ってくれる、の 9 つの設問に対する中 3 時の親の行動を測定することを目的とする。また、それぞれの質問に対して、1「父親」、2「どちらかといえば父親」、3「どちらかといえば母親」、4「母親」の 4 件法で答えてもらった。

リード文は、「以下は「親の家庭での役割」をたずねる質問です。中学 3 年時の親の行動を思い出して回答してください。それぞれの問いについて父親と母親どちらが行動することが多いと感じていましたか。

もっとも近い数字を1つ選んで○をつけてください。」とした。また、「1つ選んで○をつけてください」の部分に下線を引き、強調するようにした。

①学校への送り迎え、②励ましの言葉をかけてくれる、⑧夜食を作ってくれる、⑨弁当を作ってくれる、の4つの質問の回答の得点を足し合わせたものを〈表出的役割得点〉とした。③勉強するように促してくれる、④「勉強しろ」と口うるさくいわない、⑤テストや模試の点数が上がらなくて怒る、⑥自分の受験に興味を持つ、⑦自分の受験に興味を持たない、の5つの質問の回答の得点を足し合わせたものを〈道具的役割得点〉とした。それぞれの得点の合計得点が高くなるほど、その行動を母親がしていたことになり、合計得点が低くなるほど、その行動を父親がしていたことになる。また、分散分析を行う場合に限り、〈道具的役割得点〉と〈表出的役割得点〉を4つに再分配した。これは、合計得点のまま使用すると「どちらかといえば父」、「どちらかといえば母」の境界をはっきりさせることが困難であったため、境界を明確にすることを目的としている。

(5) フェイス項目

問9からはフェイス項目である。年齢、性別、受験経験、中3時の同居家族人数、中3時に誰と同居していたか、中3時の親の年齢、中3時の親の職業、親の最終学歴の8項目である。

分析時に、問14の〈中3時の親の職業〉の12の選択肢を5つのカテゴリーに再分配した。これは、度数が極端に少ないものをなくし、分散分析を行いやすくすることを目的としている。5つの内訳は、①民間企業（民間企業の役員・管理職、民間企業の事務職、民間企業の労務職、民間企業の営業職、民間企業の専門・技術職）、②公務員、③自由業・自営業（農林漁業の自営者・家族従業者、商工・サービス業の自営者・家族従業者、自由業）、④パート・アルバイト・臨時雇い等、⑤無職である。さらに、選択番号12番のその他に回答があった保育士、看護師、看護学校教

員，主婦を選択番号 1～11 番の適当な番号に再分配した。国家資格を有する保育士，看護師，看護学校教師の 4 つは，選択番号 6 番の公務員として再分配した。主婦に関しては，今回のデータが母親のデータであること，当時の年齢が 50 歳までであることを配慮し，選択番号 11 番の無職として再配分した（厚生労働省）（文部科学省）。

3 結果

3.1 回答者の属性

調査の結果，同志社大学の学生を中心とした 18 歳～25 歳の大学生の男女 112 人から回答を得ることが出来た。回答者の内訳は以下の通りである。性別については、男性 44 人（35.8%），女性 68 人（60.7%）であった。受験経験の有無については，幼稚園受験経験者が 9 人（7.3%），小学校受験経験者が 5 人（4.1%），中学受験経験者が 43 人（35.0%），高校受験経験者が 79 人（64.2%），大学受験経験者 91 人（74.0%）であった。また，中 3 時の回答者を含めた同居員数は，2 人が 5 人（4.1%），3 人が 17 人（13.8%），4 人が 57 人（46.3%），5 人が 25 人（20.3%），6 人が 6 人（4.9%），8 人が 2 人（1.6%）であった。今回の調査では男女の偏りがある結果となってしまったが，分析には十分なサンプルを回収することができた。

3.2 分析

直系制家族得点，夫婦制家族得点，合意制家族得点，中 3 嬉しかったこと得点，中 3 嫌だったこと得点，高 1 嬉しかったこと得点，中 1 嫌だったこと得点，道具的役割得点，表出的役割得点のそれぞれの相関を取った図が表 3 である。

表 3 受容度と家族モデル・親の家庭内の役割の相関

		使用可能 中3嬉し かったこ と	使用可能 中3嫌だっ たこと	使用可能 高1嬉し かったこ と	使用可能 中1嫌だっ たこと
使用可能 直系制家 族	Pearson の相関係 数	0.060	-0.009	0.121	-0.070
	有意確率 (両側)	0.531	0.924	0.206	0.464
	度数	112	112	111	112
使用可能 夫婦制家 族	Pearson の相関係 数	0.023	-.165*	0.110	-.200**
	有意確率 (両側)	0.806	0.082	0.250	0.035
	度数	112	112	111	112
使用可能 合意制家 族	Pearson の相関係 数	-0.149	.200*	-0.150	0.123
	有意確率 (両側)	0.119	0.036	0.121	0.201
	度数	110	110	109	110
道具的役 割	Pearson の相関係 数	-0.024	-0.091	-0.055	0.024
	有意確率 (両側)	0.817	0.372	0.592	0.812
	度数	99	99	98	99
表出的役 割	Pearson の相関係 数	0.015	-.192*	-0.017	-0.102
	有意確率 (両側)	0.880	0.052	0.862	0.306
	度数	103	103	102	103

*:P<0.1, **:P<0.05

(1) 家族モデルと受容度

「直系制家族モデルから合意制家族モデルに変化するにつれ、子どもが感じる受容度は高くなる」という仮説を検証するために家族モデルと受容度で相関分析を行った。以下では有意な相関がみられた関係のみ説明していく。相関を取った結果、〈中3嫌だったこと得点〉と〈夫婦制家族得点〉は10%の水準で統計的に有意な負の相関があり、〈中3嫌だったこと得点〉と〈合意制家族得点〉は5%の水準で統計的に有意な正の相関があり、〈中1嫌だったこと〉と〈夫婦制家族得点〉は5%の水準で統計的に有意な負の相関があった。

それぞれの関係について具体的にみていく。〈中3嫌だったこと得点〉に対して〈夫婦制家族得点〉の相関係数は-.165であり、夫婦制家族に属していると中3時に嫌だと感じた親からの行動が少なくなることがわかった。〈中3嫌だったこと得点〉に対して、〈合意制家族得点〉の相関係数は.192であり、合意制家族に属していると中3時に嫌だと感じた親からの行動が多くなることがわかった。〈中1嫌だったこと得

点)に対して、〈夫婦制家族得点)の相関係数は-.200 であり、夫婦制家族に属していると中 1 時に嫌だと感じた親からの行動が少なくなることがわかった。

さらに、〈中 3 嫌だった得点)と〈中 1 嫌だったこと得点)を解体し、それぞれの質問項目と、〈夫婦制家族得点)と〈合意制家族得点)との相関を取った。表 4 はその結果を表している。

まず、〈中 3 嫌だったこと得点)を解体した質問項目と、〈夫婦制家族得点)と〈合意制家族得点)の相関を取った。〈④悩みを伝えても軽いアドバイスで返される)と〈夫婦制家族得点)は 10%の水準で統計的に有意な負の相関があり、相関係数は-.174 であった。このことから、夫婦制家族に属していると、悩みを伝えても軽いアドバイスで返されることが少ないということがわかった。〈②テストや模試の点数が上がらなくて怒られる)と〈合意制家族得点)は 10%の水準で統計的に有意な正の相関があり、相関係数は.162 であった。このことから、合意制家族に属していると、テストや模試の点数が上がらなくて怒られることが多いということがわかった。〈②テストや模試の点数が上がらなくて怒られる)と〈合意制家族得点)は 1%の水準で統計的に有意な正の相関があり、相関係数は.328 であった。このことから、合意制家族に属しているとテストや模試の点数が上がらなくて怒られることが多いということがわかった。

〈中 1 嫌だったこと得点)も先ほどと同じように解体し、問 7 のそれぞれ 5 つの質問項目と〈夫婦制家族得点)との相関を取った。その結果、〈①「勉強しろ」と口うるさく言う)と〈夫婦制家族得点)は 5%の水準で統計的に有意な負の相関があり、相関係数は-.205 であった。このことから、夫婦制家族に属していると「勉強しろ」と口うるさく言われることが少ないということがわかった。また、〈②テストや模試の点数が上がらなくて怒られる)と〈夫婦制家族得点)は 5%の水準で統計的に有意な負の相関があり、相関係数は-.212 であった。このことから、夫婦制家族に属しているとテストや模試の点数が上がらなくて怒られることが少ないということがわかった。さらに、〈②テストや模試の点数が上がらなくて怒られる)と〈合

意制家族得点)は 10%の水準で有意な正の相関がり, 相関係数は.181 であった. このことから, 合意制家族に属しているとテストや模試の点数が上がらなくて怒られることが多いということがわかった.

表 4 夫婦制家族・合意制家族と嫌だったことの相関

		問5-1 「勉強しろ」と口うるさく言う	問5-2 テストや模試の点数が上がらなくて怒られる	問5-3 自分の受験に興味を持ってくれない	問5-4 悩みを伝えても軽いアドバイスで返される	問5-5 悩みを聞いてくれる素振りがない	問7-1 「勉強しろ」と口うるさく言う	問7-2 テストや模試の点数が上がらなくて怒られる	問7-3 自分の受験に興味を持ってくれない	問7-4 悩みを伝えても軽いアドバイスで返される	問7-5 悩みを聞いてくれる素振りがない
夫婦制家族	Pearsonの相関係数	-0.115	-0.134	-0.152	-.174*	0.016	-.205**	-.212**	-0.060	-0.094	-0.082
	有意確率(両側)	0.229	0.159	0.109	0.066	0.869	0.030	0.025	0.531	0.324	0.387
	度数	112	112	112	112	112	112	112	112	112	112
合意制家族	Pearsonの相関係数	0.083	.162*	.328***	0.057	0.086	0.093	.181*	0.078	-0.018	0.068
	有意確率(両側)	0.391	0.090	0.000	0.552	0.371	0.333	0.058	0.416	0.848	0.481
	度数	110	110	110	110	110	110	110	110	110	110

*: P<0.1, **: P<0.05, ***: P<0.01

(2) 道具的役割・表出的役割と受容度

次に、「道具的役割と表出的役割が両親で分けられている家庭に比べ道具的役割と表出的役割を両親が平等に行っている家庭の方が、子どもが感じる受容度は高くなる」という仮説を検証するために 4 分割した〈道具的役割得点〉, 〈表出的役割得点〉を独立変数, 受容度を従属変数とした一元配置分散分析を行った.

最初に〈道具的役割得点〉を独立変数とした〈中3 嬉しかったこと得点〉, 〈中3 嫌だったこと得点〉, 〈高1 嬉しかったこと得点〉, 〈中1 嫌だったこと得点〉の平均値についての分散分析を行った. その結果を表5に表す. しかし, 有意な関係はみられなかった.

表 5 道具的役割と受容度の分散分析

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
中3嬉しかったこと	グループ間	12.761	3	4.254	0.358	0.783
	グループ内	1127.319	95	11.867		
	合計	1140.081	98			
中3嫌だったこと	グループ間	10.996	3	3.665	0.310	0.818
	グループ内	1121.994	95	11.810		
	合計	1132.990	98			
高1嬉しかったこと	グループ間	18.672	3	6.224	0.392	0.759
	グループ内	1493.246	94	15.886		
	合計	1511.918	97			
中1嫌だったこと	グループ間	34.872	3	11.624	1.012	0.391
	グループ内	1090.785	95	11.482		
	合計	1125.657	98			

次に、〈表出的役割得点〉を独立変数とした〈中3嬉しかったこと得点〉、〈中3嫌だったこと得点〉、〈高1嬉しかったこと得点〉、〈中1嫌だったこと得点〉の平均値についての分散分析を行った。その結果を表6に表す。その結果、〈表出的役割得点〉と〈中3嫌だった得点〉に有意な関係がみられた。 $(F(3,99)=2.604, p<.10)$ 〈表出的役割得点〉と〈中3嫌だった得点〉では、母が表出的役割を担っていると中3時に嫌だと感じた親からの行動が少ないということがわかった。加えて、〈表出的役割得点〉と〈中1嫌だったこと〉とも有意な関係がみられた。 $(F(3,99)=2.18, p<.10)$ 〈表出的役割得点〉と〈中1嫌だったこと得点〉では、表出的役割を父か母のどちらかが担っていると中1時に嫌だと感じた親からの行動が少ないということがわかった。それぞれの結果を図2、3に示す。

表6 表出的役割の受容度に対する分散分析

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
中3嬉しかったこと	グループ間	51.770	3	17.257	1.549	0.207
	グループ内	1102.987	99	11.141		
	合計	1154.757	102			
中3嫌だったこと	グループ間	90.205	3	30.068	2.604	.056*
	グループ内	1143.096	99	11.546		
	合計	1233.301	102			
高1嬉しかったこと	グループ間	19.988	3	6.663	0.425	0.735
	グループ内	1535.002	98	15.663		
	合計	1554.990	101			
中1嫌だったこと	グループ間	77.921	3	25.974	2.187	.094*
	グループ内	1175.594	99	11.875		
	合計	1253.515	102			
*: P<0.1						

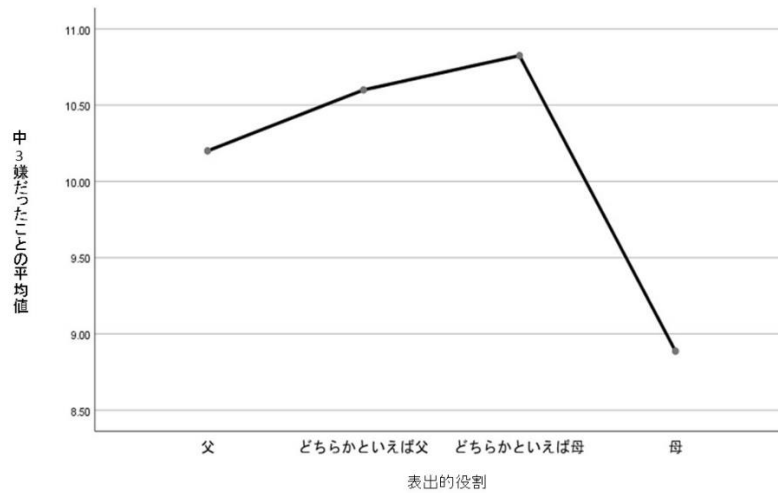


図2 表出的役割の中3嫌だったことに対する分散分析

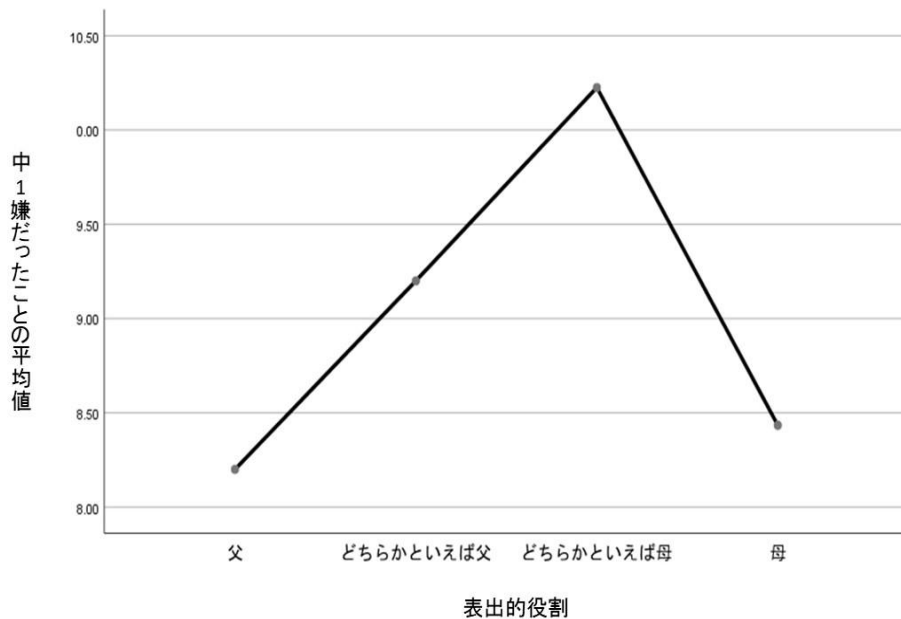


図3 表出的役割の中1嫌だったことに対する分散分析

(3) 道具的役割と表出的役割

次に、「現代の家庭では、父親が道具的役割を担い母親が道具的役割を担うという家庭内での分担構造が崩れ、両親がどちらも担っている」という仮説を検証するために、性別と〈道具的役割得点〉、〈表出的役割得点〉を用いてクロス表集計をおこなった。その結果、性別と〈道具的役割得点〉には有意な関係がみられた。結果は表7、図4に示す。このことから、回答者が女性のほうが、母親が道具的役割を担っていたということがわかる。〈表出的役割得点〉には有意な関係がみられなかったが参考程度に図5に結果を示しておく。2つのグラフをみると、〈道具的役割〉も〈表出的役割〉も母親が担っていることがわかる。

表7 道具的役割の回答者の性別に対するクロス表分析

		道具的役割				合計
		父	どちらか といえば 父	どちらか といえば 母	母	
問9-2 性別	男	1	14	20	5	40
	女	1	11	44	3	59
合計		2	25	64	8	99

カイ2乗値:6.451、有意確率:0.92

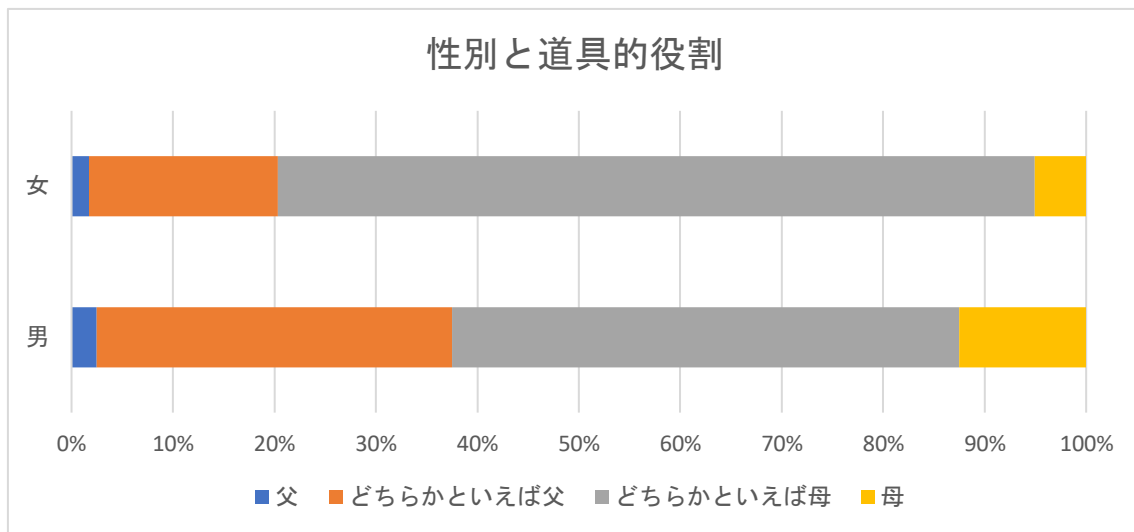


図4 道具的役割の回答者の性別に対するクロス表分析

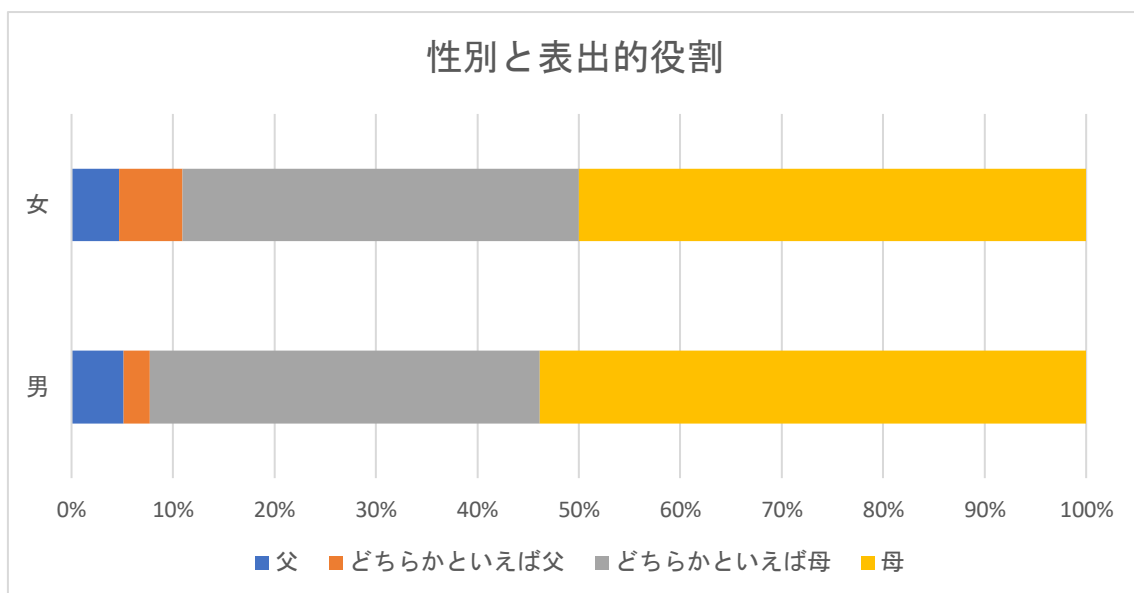


図5 表出的役割の性別に対するクロス表分析

(4) フェイス項目との関係

最後に、フェイス項目と受容度の関係を検証することを目的に一元配置分散分析を行った。以下、有意だった3パターンを説明する。

(a) 性別と〈高1 嬉しかったこと得点〉

1つ目の、〈高1 嬉しかったこと得点〉を従属変数、〈回答者の性別〉を独立変数とした分散分析の結果を表13、図14に表す。回答者の性別と〈高1 嬉しかったこと得点〉には有意な関係がみられる。

($F(1,109)=3.365, p<.10$) このことから、回答者の属性が男性である場合に比べ、回答者の属性が女性であるほうが、〈高1 嬉しかったこと得点〉が高くなるのがわかる。この結果を表8、図6に示す。

表8 性別の高1 嬉しかったことに対する分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	51.894	1	51.894	3.365	0.069
グループ内	1681.187	109	15.424		
合計	1733.081	110			

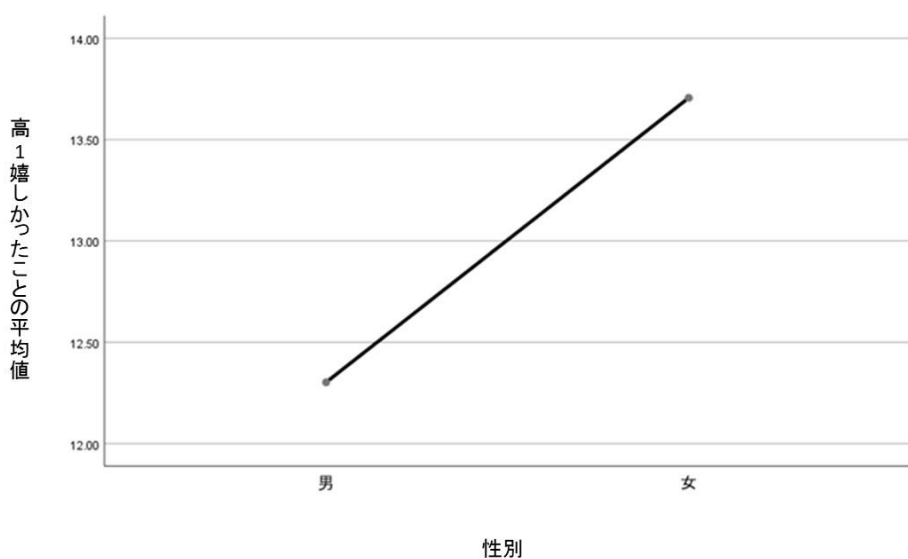


図6 性別の高1 嬉しかったことに対する分散分析

(b) 中3時の母親の職業と〈中3嬉しかったこと得点〉

2つ目の、〈中3嬉しかったこと得点〉を従属変数、〈中3時の母親の職業〉を独立変数とした分散分析の結果を表15、図16に表す。中3時の母親の職業と〈中3嬉しかったこと得点〉には有意な関係がみられる。(F(4,103)=3.026,p<.)このことから、中3時に母親が自由業・自営業、パート・アルバイト・臨時雇い等で働いていた、または無職であった回答者は、中3時に母親が民間企業で働いていた、または公務員として働いていた回答者に比べ、〈中3時の嬉しかったこと得点〉が高くなることがわかった。この結果を表9、図7に示す。

表9 中3時の母親の職業と高1嬉しかったことに対する分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	134.681	4	33.670	3.026	0.021
グループ内	1145.986	103	11.126		
合計	1280.667	107			

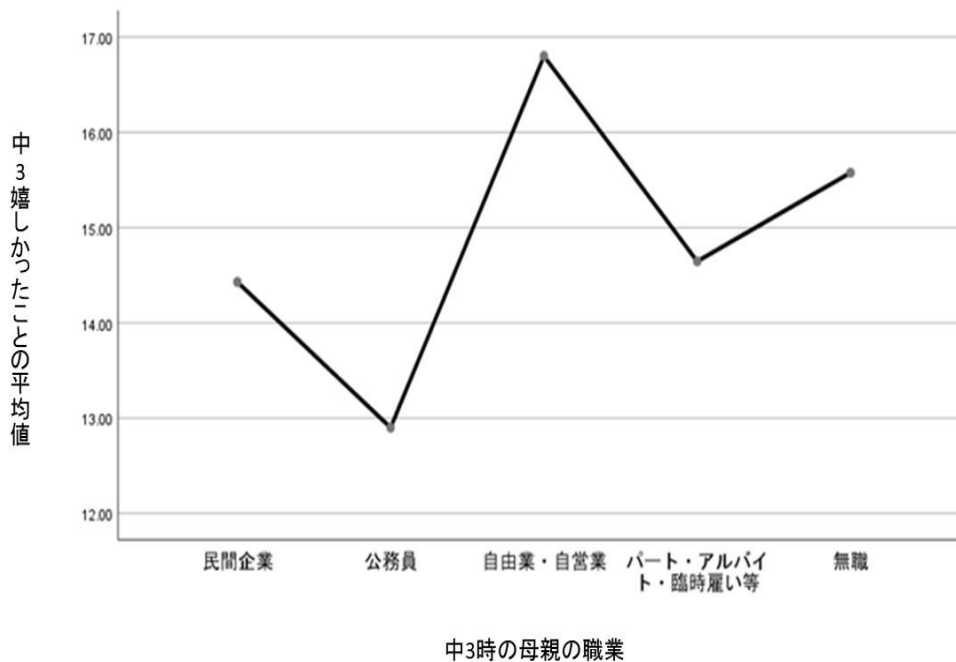


図7 中3時の母親の職業と高1 嬉しかったことに対する分散分析

(c) 中3時の母親の職業と〈高1 嬉しかったこと得点〉

3つ目の、〈高1 嬉しかったこと得点〉を従属変数、〈中3時の母親の職業〉の独立変数とした分散分析の結果を表17、図18に表す。中3時の母親の職業と〈高1 嬉しかったこと得点〉には有意な関係がみられる。(F(4.102)=2.011, p<.10) このことから、中3時に母親が自由業・自営業、パート・アルバイト・臨時雇い等で働いていた、または無職であった回答者は、中3時に母親が民間企業で働いていた、または公務員として働いた回答者に比べ、〈高1 嬉しかったこと得点〉が高くなることがわかった。この結果を表10、図8に示す。

表10 中3時の母親の職業と高1 嬉しかったことに対する分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	124.550	4	31.138	2.011	0.098
グループ内	1579.057	102	15.481		
合計	1703.607	106			

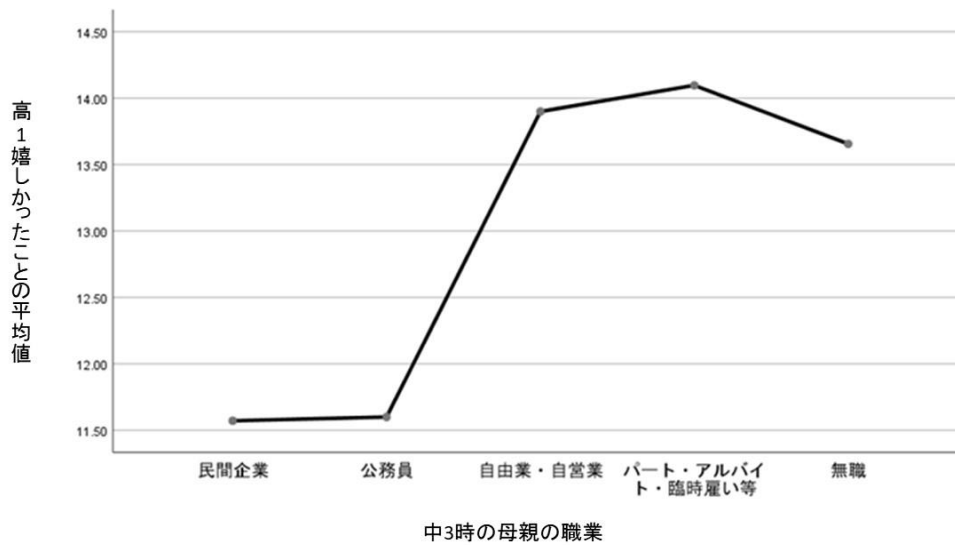


図8 中3時の母親の職業と高1 嬉しかったことに対する分散分析

4 考察

最初に、「直系制家族モデルから合意制家族モデルに変化するにつれ、子どもが感じる受容度は高くなる」という仮説について考察していく。この仮説を実証するために分析を行った結果、〈直系制家族モデル〉、〈夫婦制家族モデル〉、〈合意制家族モデル〉のすべてのモデルで受容度（嬉しかったこと）との有意な関係はみられなかった。しかし、〈夫婦制家族モデル〉と〈合意制家族モデル〉の2つのモデルと受容度（嫌だったこと）との関係があった。この結果に関しては、仮説と全く違うものとなった。〈夫婦制家族モデル〉と〈中3 嫌だったこと〉、〈中1 嫌だったこと〉に有意な負の相関があったことに関しては、核家族になり、直系家族と比べ家庭内の人数が減り、各々の結びつきが高くなったことが原因であると考えられる。また、〈合意制家族モデル〉と〈中3 嫌だったこと〉に有意な相関がみられた。結果を詳しく見ると、〈自分の受験に興味を持ってくれない〉の質問項目と〈合意制家族モデル〉との有意な相関がみられた。この結果の原因は、合意制家族モデルが、「集団としての家族」の側面よりも、「ライフスタイルとし

ての家族」という側面を重視することにあると考える。家族が個人にとっての 1 つのライフスタイルということになり、他の家族成員のことを考えたり、気にしたりすることがなくなったのではないだろうか。

次に、「道具的役割と表出的役割が両親で分けられている家庭に比べ道具的役割と表出的役割を両親が平等に行っている家庭の方が、子どもが感じる受容度は高くなる」という仮説について考察していく。この仮説を実証するために分析を行った結果、〈道具的役割〉と〈表出的役割〉のどちらとも受容度（嬉しかったこと）との有意な関係はみられなかった。しかし、〈表出的役割〉と〈中 3 嫌だったこと〉に有意な関係がみられた。これは、母が表出的役割を担っていると中 3 時に嫌だと感じた親からの行動が少ないということである。このことから、母親との情緒的なつながりが強くなることは親からの受容度を高める要因になると考えられる。また、〈表出的役割〉と〈中 1 嫌だったこと〉にも有意な関係がみられた。これは、表出的役割を父か母のどちらかが担っていると中 1 時に嫌だと感じた親からの行動が少ないということである。このことから、受験という子どもにとっての危機がなければ父親との情緒的なつながりが強くなることも親からの受容度を高める要因になるのではないだろうか。

次に、「現代の家庭では、父親が道具的役割を担い母親が道具的役割を担うという家庭内での分担構造が崩れ、両親がどちらも担っている」という仮説について考察していく。分析の結果、道具的役割・表出的役割のどちらとも母親が担っていることがわかった。このことは、道具的役割・表出的役割という面において、母親の役割が以前に比べ増加し、父親の役割が減少しているということだと考えられる。今後、道具的役割を担うことが少なくなった父親が新たな役割を獲得しているのかどうかを検討していくことが必要になるだろう。

最後に、フェイス項目と受容度についての分析を考察していく。分析の結果、〈高 1 嬉しかったこと〉、〈中 3 嬉しかったこと〉の 2 つと〈中 3 時の母親の職業〉に有意な相関がみられた。これは、母親が家に

いる時間が関係していると考え、母親と一緒に過ごす時間が長いこと、母親が家事にあてる時間が長いほど、子供が「自分のことを理解してくれている」と考えるようになるのではないだろうか。また、〈高1 嬉しかったこと〉と回答者の性別にも有意な関係があることがわかった。このことは、男性の回答者に比べ、女性の回答者は〈高1 年時に嬉しかったこと〉が多かったと感じているということである。このような結果になった原因は、先行研究でも述べたように、同性のほうが、受容度が高くなるからだと考えられる。また、水本深喜の研究では、宮本みち子と柏木恵子の理論を用いて、親子関係の特徴として、母娘関係における距離の近さが指摘され、(宮本 2004) 母娘関係は、「一卵性双生児」(柏木 1998)といわれるほどに相互の距離が近い、と述べている。(水本 2018) このように、受容度と親子関係の距離の近さにも関係があるのではないだろうか。

5 結論

最後に本論で明らかになったことをまとめ、本研究の課題と今後について述べる。本論では、3つの仮説について実証的に論じてきた。

1つ目の「直系制家族モデルから合意制家族モデルに変化するにつれ、子どもが感じる受容度は高くなる」という仮説については、「夫婦制家族」と「中3、中1 嫌だったこと」に有意な負の相関があり、「合意制家族」と「中3 嫌だったこと」に有意な正の相関があるという結果になった。「直系制家族」ほどの受容度とも有意な相関がみられなかった。また、家族モデルと「嬉しかったこと」との有意な相関がみられなかったことから、仮説とは違った結果が実証された。以上の結果から、夫婦制家族では個人としてのライフスタイルより家族としてのまとまりを重視することから、そのことが受容度を高めているということが考えられる。また、合意制家族では、家族としてのまとまりよりも個人のライフスタイルを重視することから、家

族成員が個人としての尊厳を保ち生きていくという点もあるが、時にそれがあだとなると考えることができるだろう。

2 つ目の「道具的役割と表出的役割が両親で分けられている家庭に比べ道具的役割と表出的役割を両親が平等に行っている家庭の方が、子どもが感じる受容度は高くなる」という仮説については、「表出的役割」と「中 3 嬉しかったこと」に有意な関係があることがわかった。「道具的役割」と受容度には有意な関係はみられなかった。このことから、母親との情緒的関係が強くなればなるほど親から受け入れられていると感じることが多くなることがわかった。この結果から、子どもが親から理解されていると感じるには母親の表出的役割が重要だと考えられる。このように仮説とは異なる結果になった。

3 つ目の「現代の家庭では、父親が道具的役割を担い母親が道具的役割を担うという家庭内での分担構造が崩れ、両親がどちらも担っている」という仮説については、母親が道具的役割・表出的役割の両方を担うことが多いということがわかった。このことから、女性の家庭内での役割が増加していることがうかがえる。仮説とは異なり、母親の担う役割だけが増加し、父親の担う役割は減少していた。

最後に、本研究では受容度（嫌だったこと）に関する有意な関係が多くみられたが、受容度（嬉しかったこと）に関する有意な関係はあまりみられなかった。受容度（嬉しかったこと）と有意な関係にあるのは何かを検証するのが課題であるといえる。また、母親と子供の有意な関係もよくみられたが父親と子供の関係はあまりみられなかった。父親と子供の関係性についても課題である。

本論文執筆にあたり調査にご協力していただいた大学生の方々、ご指導いただいた立木教授、マグワイア教授、データ分析、執筆の相談にのっていただいた TA の川見さん、本当にありがとうございました。

参考文献

柏木恵子（編），1998，『結婚・家族の心理学—家族の発達・個人の発達』，ミネルヴァ書房

木下謙治（監修），園井ゆり・浅井宙（編），2016，『家族社会学—基礎と応用—』，九州大学出版

厚生労働省，2018，「国民生活基礎調査－結果の概要－」

(<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa17/dl/02.pdf>)

厚生労働省，「資格・試験情報」

(https://www.mhlw.go.jp/kouseiroudoushou/shikaku_shiken/#03)

内閣府男女共同参画局，2014，「共働き等世帯の推移」

(http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h26/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-02-08.html)

新垣都代子・花城梨枝子，1987，『子供の生活と親子の反応(第2報)－行動による親子のコミュニケーション－』，日本家庭教育学会誌，第31巻，第1号

野々山久也，2007，『現代家族のパラダイム革新－直系制家族・夫婦制家族から合意制家族へ－』，東京大学出版会

水本深喜，2018，『青年期後期の子の親との関係:—精神的自立と親密性からみた父息子・父娘・母息子・母娘間差—』，教育心理学研究，66巻，2号，111-126

文部科学省，「高等学校教員（看護）の免許資格を取得することのできる大学」

(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoin/daigaku/detail/1287077.htm)

文部科学省，「教育免許制度の概要」

(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoin/1339300.htm)

落合恵美子，1994，『21世紀家族へ』，有斐閣

外山美樹・樋口健・宮本幸子, 2014, 『高校受験期における母親からのソーシャル・サポートが子どもに与える影響』, 発達心理学研究, 25 巻, 1 号

高見 三奈, 佐藤 幸子, 塩飽 仁, 2009, 『親の役割受容と親役割行動が子どもの評価する家族機能と精神的健康に与える影響』, 日本看護研究学会雑誌, 第 32 巻, 第 2 号

Talcott parsons, Robert F. Bales, 1955, *Family, socialization and interaction process*, Glencoe, Ill., Free Press (=2001, 橋爪貞夫ほか訳,

『家族一核家族と子どもの社会化』, 橋爪貞雄ほか訳, 黎明書房

戸田まり, 2009, 『親子関係研究の視座』, 教育心理学年報, 48 巻

山村 賢明, 1964, 『親子関係と子どもの社会化—文化の観点から—』, 教育社会学研究, 第 19 巻